

木理美しき椀胸、縁にはわざと赤檜を用ひたる岩畳作りの長火鉢に對ひて話し敵もなく唯一人、少しは淋しさうに坐り居る三十前後の女、男のやうに立派な眉を何日掃ひしか剃つたる痕の青々と、見る眼も覚むべき雨後の山の色をとどめて翠の匂ひ一しほ床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリりと上り、洗ひ髪をぐるぐると酷く丸めて引裂紙をあしらひに一本簪でぐいと留めを刺した色気無の様はつくれど、憎いほど烏黒にて艶ある髪の毛の一綜二綜後れ乱れて、浅黒いながら洪気の抜けたる顔にかかれる趣きは、年増嫌ひでも褒めずには置かれまじき風体、我がものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれせぬ詮議を蔭ではすべきに、さりとは外見を捨てて堅義を自慢にした身の装り方、柄の選択こそ野暮ならぬ高が二子の綿入れに繻子襟かけたを着て何所に紅くさいところもなく、引つ掛けたねんねこばかりは往時何なりしやら疎い縞の糸織なれど、これとて幾度か水を潜つて来た奴なるべし。

今しも台所にては下婢が器物洗ふ音ばかりして家内静かに、他には人ある様子もなく、何心なくいたづらに黒文字を舌端で黴り躍らせなどしてゐし女、ぷつりとそれを噛み切つてぷいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋まで奇麗にして、さて南部叢地の大鉄瓶を正然かけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産とくれたらしき寄木細工の小織麗なる煙草箱を、右の手に持た鼈甲管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吸ふて線香の煙るやうに緩々と煙りを噴き出し、思はず知らず太息吐いて、多分は良人の手に入るであらうが憎いのつそりめが対ふへ廻り、去年使ふてやつた思も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、強て此度の仕事をせうと身の分も知らずに願ひを上げたことや、清吉の話しては上人様に依怙最眞の御情はあつても、名さへ響かぬのつそりに大切な仕事を任せらるる事は檀家方の手前寄進者方の手前も難しからうなれば、大丈夫此方に命けらるるに極つたこと、よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴に出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事出来し損ずるは眼に見えたことよしなれど、早く良人が愈々御用命かつたと笑ひ顔して帰つて来られればよい、類の少い仕事だけに是非して見たい受け合つて見たい、慈悲はどうでも聞はぬ、谷中感應寺の五重塔は川越の源太が作りをつた、ああよく出来した感心なといはれて見たいと面白がつて、何日になく職業に気のはづみを打つて居らるるに、もしこの仕事を他に奪られたらどのやうに腹を立てらるか癩癩を起さるか知れず、それも道理であつて見れば傍から妾の慰めやうもない訳、ああ何にせよ目出度う早く帰つて来られればよいと、口には出さねど女房氣質、今朝背面から我が縫ひし羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣ふところへ、表の骨太格子手あらく開けて、姉御、兄貴は、なに感應寺へ、仕方がない、それでは姉御に、済みませんが御頼み申します、つい昨晚酔まして、と後はいはず異な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑ひながら、仕方のないもないもの、少し締まるがよい、といひいひ立つて幾千かの金を渡せば、それをもつて門口に出て何やら諄々押問答せし未此方に来りて、拳骨で額を抑へ、どうも済みませんでした、ありがたうござりまする、と無骨な礼をしたるも可笑。

木理美しき椀胸、縁にはわざと赤檜を用ひたる岩畳作りの長火鉢に對ひて話し敵もなく唯一人、少しは淋しさうに坐り居る三十前後の女、男のやうに立派な眉を何日掃ひしか剃つたる痕の青々と、見る眼も覚むべき雨後の山の色をとどめて翠の匂ひ一しほ床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリりと上り、洗ひ髪をぐるぐると酷く丸めて引裂紙をあしらひに一本簪でぐいと留めを刺した色気無の様はつくれど、憎いほど烏黒にて艶ある髪の毛の一綜二綜後れ乱れて、浅黒いながら洪気の抜けたる顔にかかれる趣きは、年増嫌ひでも褒めずには置かれまじき風体、我がものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭ではすべきに、さりととは外見を捨てて堅義を自慢にした身の装り方、柄の選択こそ野暮ならぬ高が二子の綿入れに繻子襟かけたを着て何所に紅くさいところもなく、引つ掛けたねんねこばかりは往時何なりしやら疎い縞の糸織なれど、これとて幾度か水を潜つて来た奴なるべし。

今しも台所にては下婢が器物洗ふ音ばかりして家内静かに、他には人ある様子もなく、何心なくいたづらに黒文字を舌端で黴り躍らせなどしてゐし女、ぶつりとそれを噛み切つてふいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋まで奇麗にして、さて南部叢地の大鉄瓶を正然かけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産とくれたらしき寄木細工の小織麗なる煙草箱を、右の手に持た鼈甲管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吸ふて線香の煙るやうに緩々と煙りを噴き出し、思はず知らず太息吐いて、多分は良人の手に入るであらうが憎いのつそりめが対ふへ廻り、去年使ふてやつた思も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、強て此度の仕事をせうと身の分も知らずに願ひを上げたやら、清吉の話しでは上人様に依怙最眞の御情はあつても、名さへ響かぬのつそりに大切の仕事を任せらるる事は檀家方の手前寄進者方の手前も難しからうなれば、大丈夫此方に命けらるるに極つたこと、よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴に出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事出来し損ずるは眼に見えたことよしなれど、早く良人が愈々御用命かつたと笑ひ顔して帰つて来られればよい、類の少い仕事だけに是非して見たい受け合つて見たい、慈悲はどうでも聞はぬ、谷中感應寺の五重塔は川越の源太が作りをつた、ああよく出来した感心なといはれて見たいと面白がつて、何日になく職業に気のはづみを打つて居らるるに、もしこの仕事を他に奪られたらどのやうに腹を立てらるか癩癩を起さるか知れず、それも道理であつて見れば傍から妾の慰めやうもない訳、ああ何にせよ目出度う早く帰つて来られればよいと、口には出さねど女房氣質、今朝背面から我が縫ひし羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣ふところへ、表の骨太格子手あらく開けて、姉御、兄貴は、なに感應寺へ、仕方がない、それでは姉御に、済みませんが御頼み申します、つい昨晚酔まして、と後はいはず異な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑ひながら、仕方のないもないもの、少し締まるがよい、といひいひ立つて幾千かの金を渡せば、それをもつて門口に出て何やら諄々押問答せし未此方に来りて、拳骨で額を抑へ、どうも済みませんでした、ありがたうござりまする、と無骨な礼をしたるも可笑。

木理美しき椀胸、縁にはわざと赤檜を用ひたる岩畳作りの長火鉢に對ひて話し敵もなく唯一人、少しは淋しさうに坐り居る三十前後の女、男のやうに立派な眉を何日掃ひしか剃つたる痕の青々と、見る眼も覚むべき雨後の山の色をとどめて翠の匂ひ一しほ床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリりと上り、洗ひ髪をぐるぐると酷く丸めて引裂紙をあしらひに一本簪でぐいと留めを刺した色気無の様はつくれど、憎いほど烏黒にて艶ある髪の毛の一綜二綜後れ乱れて、浅黒いながら洪気の抜けたる顔にかかれる趣きは、年増嫌ひでも褒めずには置かれまじき風体、我がものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭ではすべきに、さりとは外見を捨てて堅義を自慢にした身の装り方、柄の選択こそ野暮ならぬ高が二子の綿入れに繻子襟かけたを着て何所に紅くさいところもなく、引つ掛けたねんねこばかりは往時何なりしやら疎い縞の糸織なれど、これとて幾度か水を潜つて来た奴なるべし。

今しも台所にては下婢が器物洗ふ音ばかりして家内静かに、他には人ある様子もなく、何心なくいたづらに黒文字を舌端で黷り躍らせなどしてあし女、ぶつりとそれを噛み切つてふいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋まで奇麗にして、さて南部叢地の大鉄瓶を正然かけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産とくれたらしき寄木細工の小織麗なる煙草箱を、右の手に持た鼈甲管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吸ふて線香の煙るやうに緩々と煙りを噴き出し、思はず知らず太息吐いて、多分は良人の手に入るであらうが憎いのつそりめが対ふへ廻り、去年使ふてやつた思も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、強て此度の仕事をせうと身の分も知らずに願ひを上げたやら、清吉の話しでは上人様に依怙最眞の御情はあつても、名さへ響かぬのつそりに大切な仕事を任せらるる事は檀家方の手前寄進者方の手前も難じからうなれば、大丈夫此方に命けらるるに極つたこと、よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴に出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事出来し損ずるは眼に見えたこと、のよしなれど、早く良人が愈々御用命かつたと笑ひ顔して帰つて来られればよい、類の少い仕事だけに是非して見たい受け合つて見たい、慈悲はどうでも聞はぬ、谷中感應寺の五重塔は川越の源太が作りをつた、ああよく出来した感心などいはれて見たいと面白がつて、何日になく職業に気のはづみを打つて居らるるに、もしこの仕事を他に奪られたらどのやうに腹を立てらるか癩癩を起さるか知れず、それも道理であつて見れば傍から妾の慰めやうもない訳、ああ何にせよ目出度う早く帰つて来られればよいと、口には出さねど女房氣質、今朝背面から我が縫ひし羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣ふところへ、表の骨太格子手あらく開けて、姉御、兄貴は、なに感應寺へ、仕方がない、それでは姉御に、済みませんが御頼み申します、つい昨晚酔まして、と後はいはず異な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑ひながら、仕方のないもないもの、少し締まるがよい、といひいひ立つて幾千かの金を渡せば、それをもつて門口に出て何やら諄々押問答せし未此方に来りて、拳骨で額を抑へ、どうも済みませんでした、ありがたうござりまする、と無骨な礼をしたるも可笑。